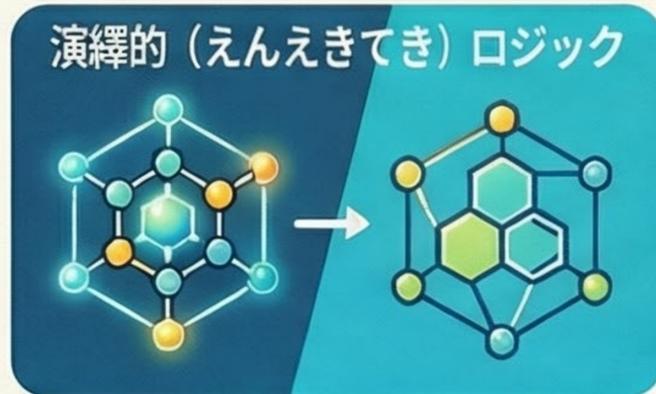
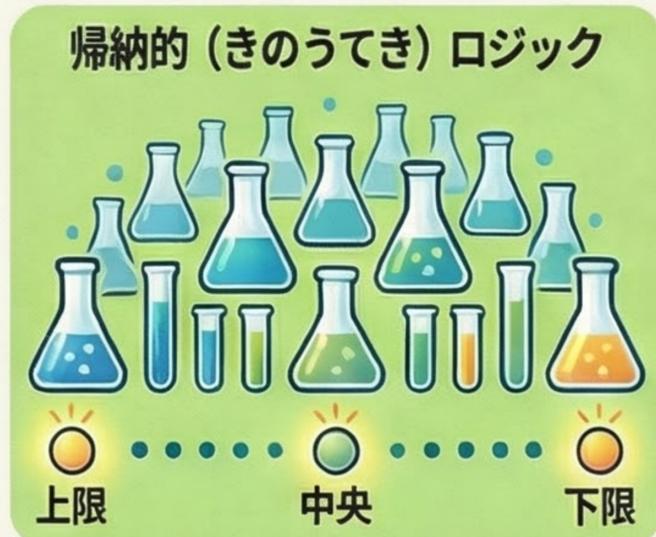


# 化学分野の特許明細書：サポート要件をクリアする構成の要諦

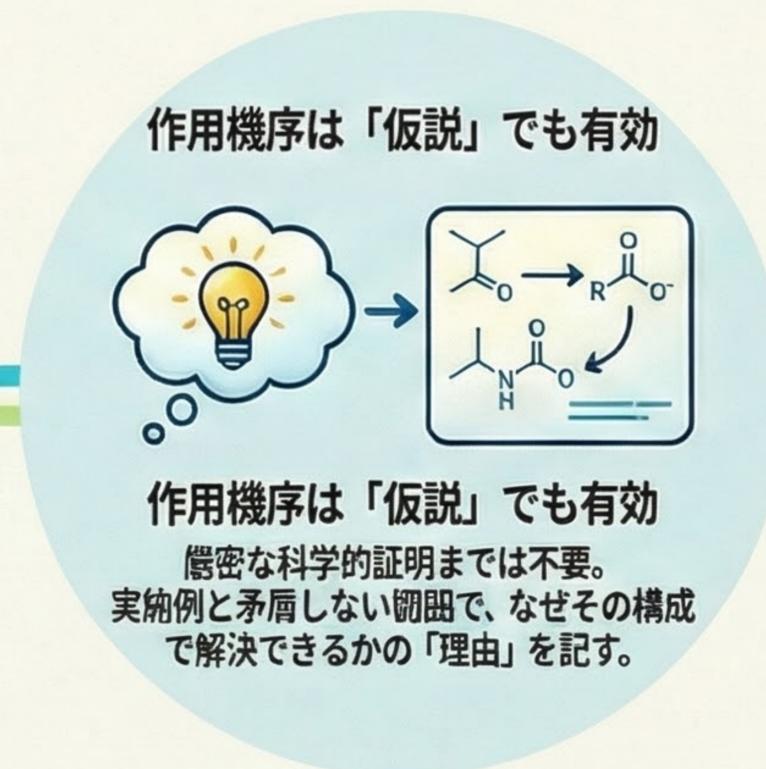
特許庁の審判実務者研究会報告書（2025年）に基づき、化学分野の特許における「サポート要件」の判断基準を整理。課題解決の論理が「演繹的」か「帰納的」かによって、求められる実施例の数や記載内容が大きく異なることを示します。



**演繹的（えんえきてき）ロジック**  
技術常識や理論で機序を説明できる場合。実施例は「最も不利な1点」があれば充足し得る。



**帰納的（きのうてき）ロジック**  
実験データの蓄積で効果を示す場合。数値範囲の上限・下限・中央を網羅する多数の実施例が不可欠。



過去の裁判例から見るロジックの成否と判断の分かれ道

発明分野	ロジックの種類	判断結果	ポイント
抗体医薬	演繹的	○ (充足)	技術常識から機序が説明可能であった
食品（減塩）	帰納的	× (不充足)	最も不利な塩部の復帰例と機序の記載が欠知
ガラス	演繹的	○ (充足)	組成調整の試行論説が技術常識と認められた

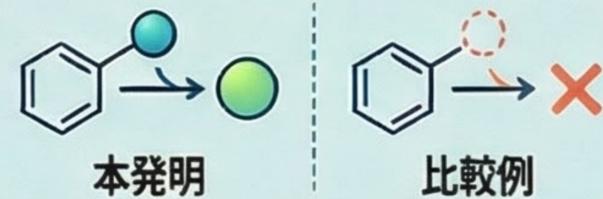
## 拒絶を防ぐための「記載の鉄則」

数値範囲には「3点」の裏付けを

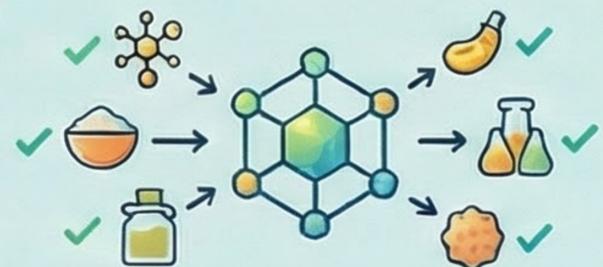


請求範囲の「上限・下限・中央」のデータを揃え、特に不利な端値での効果を立証する。

比較例による「必要性」の対比



**比較例による「必要性」の対比**  
構成要件を欠く比較例を記述し、その要件が課題解決に不可欠であることを対比的に示す。



任意成分の影響を明記する

他の成分（調味料や添加物など）が機序を妨げないこと、または影響が軽微であることを予め記載しておく。